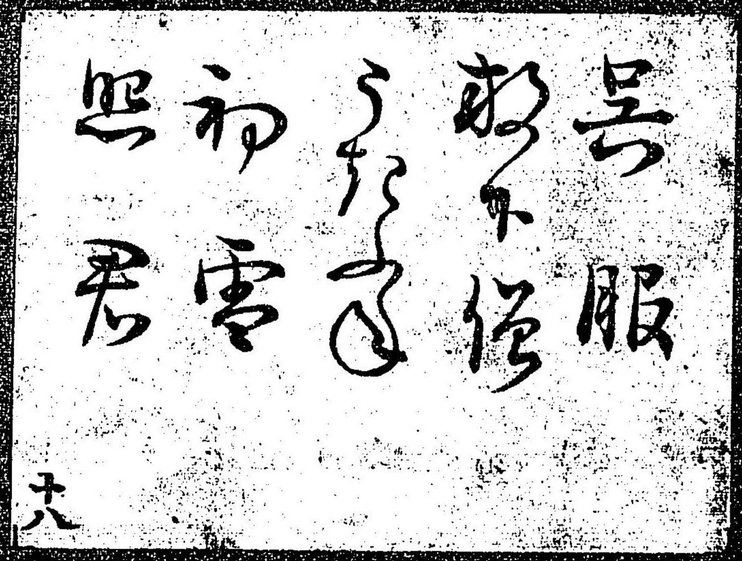
特42
452



255
164

明治9年
内交

宮内省

呉服
道ゆきする時
豊明
拝見
なる臣も我も移
集
是より浦伝ひ
里も

なほ行（ゆ）けば、江（え）の尽（つ）くる所に至（いた）れり。長（なが）き汀（みぎは）に松（まつ）ありて、蔭（かげ）涼（すず）しく、むしろ敷（し）きたるやうなるまであり。漁人（ぎょじん）のここもかしこも、小船（こぶね）に乗（の）りて行（ゆ）き交（か）ふも、なほ国（くに）異（こと）なるここちぞする。

程（ほど）なく国異（こと）なる服（ふく）の男（をとこ）、女（をんな）、老（おい）も若（わか）きも、打（う）ち混（こ）じりて、船（ふね）にて寄（よ）り来（く）。色（いろ）黒（くろ）く、衣（きぬ）短（みじか）く、袖（そで）狭（せば）く、裁（た）ち様（やう）異（こと）なり。言（こと）葉（ば）も通（かよ）はず。ただ笑（わら）ひ興（きょう）ずるのみ。

三里（さんり）ばかり行（ゆ）くほどに、あやしき女（をんな）、立（た）ち寄（よ）りて、言（こと）葉（ば）のいとおもしろく聞（きこ）ゆるを、機織（はたおり）なるべし。天（あま）の羽衣（はごろも）の縁（えん）なるべし。

帰（かへ）り来（き）て、国異（こと）なる服（ふく）の男（をとこ）、女（をんな）の名（な）、ともかくも分（わ）かざりしかば、その秋（あき）、北国（ほっこく）へ行（ゆ）きて、久（ひさ）しく住（す）みたる人（ひと）のもとへ、文（ふみ）を書（か）きて、女（をんな）の名（な）、男（をとこ

袖で寝るそれその里まくもがり
きくれてまた名前うか是を賢き代
の為遣うそ機拵の大和も
織る唐きぬのをくく今數鴻
乃なけくことの葉草の花まくも
と、、きぬ袖もぬ、、
繁の袖もぬ、、あるかきくれく

早
それ此松原を歩くくるる姿ハ唐人
あまた女性二人をもとおりひとり
き糸をれくそその里人とハみそ
すそもかくいうあまた人うそ
ごや里そあれなる松原の潮もる
夕日の影なたて浦伝のこそり
はそれくく機と音風しと思ひ

つゝまもるうや祝ふてやいをくゝ何をうつみ給ふ其分ハ常ゝ宮人なりて社頭をおそ様おり給ふ不審なりいふ程名ハ何とたまふ事今ハ何をうつきハ宣命奏ル乃字あり長拍子とりあやもとりやし女今之自出度代なれハうつゝ

ハ是ハ昔の君うつきのはすかれそれハ昔の君うつきさゝ綾織ニ人の事あるう今現在ハ是ハ何とそふやらそゝもやくもん海ハこゝろ先ハ里をくれとの里ど名付神をなよゝ我ハ不ふ俗故こ

たもとの糸をとりて玉ぼこの道の行
かもなく次なあるをとりとゞやも
呉服とゝなる機杼の糸引本をゝれ
葉といくゝ呉服とる手よそくをて
たもとをもとゝなりされゝなる
よせて呉れとり綾とゝや倭ことを
なもゝ秋くゝ人をゝ大和句を

きてゝなも呉服とりあやこゝをに
有かなゝ二村山と御そんもみとりを
思ふ心あり君とくれて榮とりあやゝめよ
ゝ秋人のくゝ月てとゝはさくう玄なゝ
きおゝ秋人の梁とりてを心かくゝ庵人とゝみくを
ゝ境をくゝはゝ玄かもやゝ君なゝ
ゝをくゝ人有かゝ玄綾とゝゝ

をろち、呉郡の地より徹り免く、
女王のおくにいとなをも
非功皇后三韓をきりしたがへ
和國異朝のひろくの國迄あひく
世のひかりの日をとゝかやき
普くて國富民豊かなり 東南雲收
まりて 西ゆる風靜かなり 寔に天皇

の仁字ぐよ呉國乃勅使、我國まで
免く来り給ひ、あや女いよめ乃
女婦をそく萬里の蒼波を凌き来て
西日うけ猿りおく、そもてもの里まで
ひ連日よろる機杼の錦綾をりく
綾の衣をきる勅使奏覧有うへ
叙感甚多 左より名付つ 衰龍

の唐衣久しいとあ
をうつゝに乳色となり雲鳥と
みさをたゝをあやもとあいなもかこう
もゝ物思ふ万代なるなきを
なるゝとこの定め有より景服の文
字を尾ゝけて呈狼ろり綾ねこりせ
名待さを待くハ年を重ゝく色をあ

綾の錦にうつゝ袖古き
例をしくいとかゝ
是なつけても山君の
方明の夜すゝ日如き例
上
ぬさち〳〵ハもゝおれ
君のは浦なく
ぬれ袖色を小車の

時を暁のそらを待ちて安をうく妹
らんさるといてふく昌服とりあやも
とをゆれども鶏かまつ鳴すや夜もふ
なりと紛給へ夜長くとても待ちく
早とへきうもいさらく沈杉陰に
狂居て風もそよく寅の時ぞ
告をう紛居うるく後ちて君ら代ハ天乃

羽衣まれてきてなりともつきぬる
あらなんも世うやちよを松の葉の
散うせすて代の例ひくをハ薛れ高もき
る時代うか
浪よ歎てそふる機おと 錦城
ある機杼の音よ相思乃宮を昌ハ

衣うつ砧のうくるなる風
不破の関うつ波の音
機物の綾もそれ葉のまに〳〵
きりもそうちやう
うくと鬼魔
包宮織姫のかう
の神奈備の柚
思百出

なや七夕の〳〵適あくる
の精霊妙童菩薩
よもそう〳〵たり
おりそ〳〵我君よ
二人の織姫異花あ
それ葉あやそのそ
そなるほ代そう

乙男の
是そ下野國の住人真木定れた事つ
何某うふ小次郎とも者ふてふ相模國の住人刀稱、
親ふくふものふ相模國の住人刀稱、
の信俊を討をて作ふ釈う釈の敵
ふ事ふ近國ふおふく其隠をなふ
得ずがふ稽勢釈ふかふ十ふ兄弟か

放下僧

らてハなくと行ま
兄みくと若そこそ
近きちる所く行
合をそもと存こ
誰ヲテ
小次郎殿ヲテといや此
なくと先から所通りとく
の為ニ出ましてハ唯今命る事
鐘を像まあ所ニ探り歌乃意
ことを囲ませくと其かくまなく
行ま、そもして討ヲテをも存候合の
為り集ヲテくと実ニつまらう親
ゐて敵のことハなくおりひとく
かれハ極ゐ和ニ兄弟ふうてハ

なく狂ふ男子なり兵は之
を正く待つべし然りかるたを討ね
若し不善み分と中事みし（シテ）親のう
ときを討ねそし不善み例とやみ
嗔恚邪性のものなりやまし
私行ていと（ト）いや親の敵を討く者
み備なる謂のし（シテ）其いそをそ作

とそうし（シ）事まや（ヤ）母（モ）の悪虎まとう
き其敵をとらんとて（テ）百（モ）年帰（キ）ず望
つ出て行ふ武々（タケ）き尾とれはの
ふくれ（レ）毛（ケ）仰（オ）ぎて（テ）も（モ）去れありを
敵虎と心得（エ）ふく（ク）る矢なれ（レ）ふり
く射（イ）其矢則ち（チ）血流を
たとそそ（ソ）ぎて（テ）兵（ヒヨ）思（オモ）ひ（ヒ）ぬ（ヌ）ち

作く（シテ）古き面白き（謡をひいて舞り
い袖を（ニ）さゝらのおもひ（こう）をもそて（ヘ）
きりゝゝ彼老（ヒ）女（ヒ）の何ゝゝて（を）付
ゐまう（ヒ）今袖（ヘ）人の（ヒ）ハなゝゝ（ヒ）なる（ニ）天（ヒ）
ゐなりあまゝゝと（ヒ）在作（シテ）是ハ（ヒ）なそ
ゐ袖を（ニ）さゝらの旅（ヒ）なりゝゝをもし

みくゝ（シテ）さゝらをおひさゝら
ゐの道ゝ（ヒ）趣（ヒ）
おもひ（ヒ）ハ（ヒ）ゐまも姉（ヒ）く
く（シテ）さゝもすゝく（シテ）之也る 古（ヒ）の
名殘もさそれ有明乃（ヒ）く（ヒ）（シテ）なゝ
きなゝゝあゝゝる（ヒ）命そ浪り（ヒ）兄弟ハ
其心をや（ヒ）頼もゝゝん（ヒ）ゝゝ（ワキ男次第）あゆみ

を運ん神垣やしづくあつそねちろ
のまそ河 是ハ相模国の住人刀秋の
信俗申老ていねもかりを
たくき名見仕ある詰有
三島よ集治ますれ問船芸
事を申付らくさる細のら号某名

字そやしかほしてあくおもろの秋
ホり自根やれ俗俗ふりの左を舘
まくく姿河もよりしの甚
ぬるまひをうくまると思ひ捨ま八屋
そき男を志てなろハまりふん
落紀一葉よ春をすす白雲青山
おもとや流み山よ秋ふて

紅葉をあらそふ色やあら
のあらし夕日の雨
芝苔そゆふ露の村時雨宮
めなき世の古川のおもてふる
我うき人をあらふやそうそ
何と放下とやう法師
乃名をなのてまいりたく候

ふるとも
流水を申付さて
名字ハ何とやら
とうりを思ふ二神の衣を
懺悔の袈裟をうけ十九
手を握りてそ僧とな
形ハ出家も心ハ俗

なつけくおぼ
こらん（シテ）大雲
を出（デ）静なる時ハ明月と乙（ヲ）
清風唯（ダ）同性（ニ）諸法を心（ニ）存（ジ）て
心地修（シ）の種（ヲ）まく（ヲ）秋（ニ）有（リ）つ（ル）ハ
道理なり（ニ）さ（ル）ハ（ヲ）
圓扇の百首（ヲ）
詠（ジ）ろ（ル）ハ（ヲ）
ろ筈（ハ）持給（ヒ）是（ヲ）お信（ジ）
道異（ナ）さう（ニ）
烏兎（ト）形（ヲ）
祝法を表（ス）
通乃ろに智
の軍を破（リ）
をもち（テ）

対するときへあるひ
今日とうのように
なるものもいまひそく
き仏まの祖師禅佛へ何と申す
ものそ宗体ありうる
中へ教外別傳まる
註をうまて言句よ出をへ教よ有文
字をなまの宗体よ当く唯一筋の
翻まに風の行方をは説きよ実帰自
らは投座後のち公案何と心得つき
ふくへ迷高の底よ徹て出てへ之味
の口まよ自分自佛へ把ろる白
雲深き峯金龍躍る生死よ住をへ
輪回の苦生を死を離をへ断見の

外（ヨワ）相空乃一法を切（ツル）て云（イフ）とうに
あ（テ）きりて云（イフ）ときは相対り待
法乃句あるゆゑおさ（ヲ）ふ（ヲ）ことあるそれ（ヲ）ろ
うなもの（ヲ）何（ヲ）とぞ中（ヲ）ふ（ヲ）ことあるそれ（ヲ）ろ
ことなし（ヲ）色（ヲ）なる出（ヲ）南無三宝（ヲ）
をそ（ヲ）て人（ヲ）其心や（ヲ）ふ（ヲ）岩根の山（ヲ）
ぶ物語（サレコヲ）ん（ヲ）それ（ヲ）ぞ（ヲ）れ（ヲ）ぞ（ヲ）れ（ヲ）ぞ（ヲ）れ

なくふみあひてそこらなる蛙のあつまり
あひ心乃有あはを見ぬ秋をとを
つきくさ萩乃葉そよく古沼の田面は
おりる霧なきくなる葉の雲ゆふ
時雨はまこひあつる小男鹿ぞなく
もみぢ見を山ふもとゆひなびてゆひなびまく
ねをひあふ由良の湊の鈎ふね

魚をえて笞ねをもつ里を見れば
きく時ハ暗れあくる冬霞
春乃そら物霞ミ谷ゆく琴ゆふ
花乃ちり曇ミ空ハ春ハ雨ハ
春理里なりとおもふ心ハ悟り
こゝろやル風ハ住そめる深雪の種と
こゝろやなをもくん カハコホヒ乃島おそ
花の和や葉ハ片地てよそく 東ハ片地

そ祇園清水ねちく流の音なれ
地を乃椙むらく西へ法輪峰峨
乃寺まくらハ雨ま水まの椙のみ垣
みをきれ川ハ河ハ椙ハみよもまくく
ら雀ハ竹よもまくく野辺乃すきそ
風よまくく教の生そなよもまく
葉向ハひきなたもまくく実まとも

まくくよこきくく
あきりとこにくの竹芝代ねね
てちをきめまく代れ法まて
郭くあまくきと詠 弓 おくひ性ま椙まく
元年月れ慢のまく今ここちまを
の体り融をうれ討うんをもくて兄
弁念力れくく昔期のありてもち

ちよ親のうきを討事も希なり深
きゆくよりも名ぞ惜しけれ
をみな代よりもめでたき名ぞ

二百七十六オ

乃浦りや足ま、
くゝて須ようち乃きよ着ゝ。
年体ゝし名前ゟ
手女 中冷 手書
ゟまつゝみて
うき分う乃 サレコエ 住ゝて
ゝゝゝ

此宇治の里みる人も
しをるく袂(テ)所(ト)なく
歩くハ志らしたに先(ニ)立(タ)ちて里(サ)人
なくほゝめもの(ン)乃(ノ)介(スケ)を招(マネ)
例(レイ)のおなじ(ニ)女(ヲナ)みあれ(タ)ば(ニ)
あくねうさ(ニ)堪(タヘ)ぬ(ニ)
てハ志り侍(ラ)ふ(ニ)

事(コト)へ光源氏の(ノ)
周(マワ)りきた(ル)心(コヽロ)ばへ(エ)
等(ナド)りうの(ノ)人乃(ノ)作(ツクリ)
志(シ)うと(ト)もと(ト)
みハ何(ナニ)と(ト)もなく(ク)
く(ク)癒(コヽロ)かく(ク)
侍(ラ)ふ(ニ)

物語(モノカタリ)それ(レ)さく(ク)
心(コヽロ)ばへ(エ)給(タマ)ふ(フ)
人乃(ノ)作(ツクリ)もの(ノ)
名(ナ)を
もと(ト)
あま(マ)さ乃(ノ)
さもきこゆ(ユ)るの(ノ)勘(カム)
きたち(チ)それ小鳥(コトリ)
へ河(カハ)より(リ)
もち(チ)夕(タ)

煙を河風よ行雲の跡よるを雪や
なそくく山かひをうけまくも
あたよるよ生あくく軽羽をうちや
思ひやくく

や仏もゝたりてうくく猶くく
物語作く里於ゐ
もゆみくくとうの心ひろけまゝ

ひろおてそん言の葉よ玉やあ
もあくゆみ月於ゐ
ゝすき先此里はよるくくあまく
住於ゐ多豪
薫大将のかをそあり
名ちり給へかくもなくを心
さよくくありておちるますて

しよ（ヤヲ）おひ（ヲ）さうもの（ヲ）ちかく（ヲ）せて（ヲ）人（ヲ）の（ヲ）ちかく（ヲ）
めうきこそ（ヲ）と（ヲ）色（ヲ）みうき（ヲ）心（ヲ）みや（ヤ）
ともよ。（ヲ）おりぬ（ヲ）
ひのくめもの（ヲ）なん（ヲ）きのしく（ヲ）寺（ヲ）ねお（ヲ）
（ヲ）くらいまで（ヲ）
はそこ（ヲ）もいを（ヲ）不便（ヲ）あるも（ヲ）
ときあまや（ヲ）其（ヲ）
（ヲ）業（ヲ）のいとはるき（ヲ）よ（ヲ）
（ヲ）也よさても（ヲ）山（ヲ）をみ（ヲ）

（ヲ）
のめづ（ヲ）あり（ヲ）
よしみく（ヲ）有（ヲ）明（ヲ）
あそた（ヤヲ）水（ヲ）のおそく（ヲ）
里（ヲ）舟（ヲ）こめ（ヲ）
（ヲ）ありさまみ（ヲ）ころ（ヲ）
（ヲ）月（ヲ）のある（ヲ）
（ヲ）おそくそりおき（ヲ）
（ヲ）行（ヲ）そて（ヲ）汀（ヲ）のこほり（ヲ）
（ヲ）と（ヲ）有（ヲ）を（ヲ）淺（ヲ）
（ヲ）ひ（ヲ）方（ヲ）もまそて（ヲ）
（ヲ）思（ヲ）ひきく（ヲ）そまねあり（ヲ）

めでたき事ども洞の雨をあきうんぬん事
そでくるよ思ひ出せなるもの
やと新きまへたるなくて絵を
跡なくなりぬおもかげをかきとめ
ものするあり。栖ハ小野ぬしなれ。

みやこのたてるまどころ
きや何とやらん事たるたに
作者して小野みてハなどとぞ
かくれあり。大ひえや杉むら
そあけまきも横川の水ぬもむる
をこ比叡坂とぞ
の分をひくこと悩む事なんみる多なり

法力をたのつて給百つあまつくが
よきんやうさうきくかつ雲乃跡をあく
かつもつかつくあつよもつくく
今も其世をうちつ山のふもつくく
つかつもはよつあつ流れ小野ゝ里村
あれつけの絶めつくつんくく
なれテイ
定めん深みわせ法乃ちつをたのそ
なり遠まやもとより秋ハ深み乃
よつつつてたつ世よつきつ
きんやを思ひ出ひ世よつくもなつそ
やあけれひてくはる夜
たつつよひてくはる夜
風もなつつ川波も関そよ

あらゆるをとこみよりうち
ゆくとおもひよるをかりも心もそなたを
てこまをなくされて
うみもきもなまやあさまや
くおたちられのおもかう
をみてよるくもぬ加筆
大慈大悲のことをもりをくせよ

ひろくれやはまやうに心ひとつをおこう
すに明てゆる日をうけをたくぬ光と
あきくそれてゆみよまよくき
ほのせうけて軒みにはヤヲたのう
まて観音乃慈悲をもつをせさ
よくな横川僧都小野なもあひ祈を

初雪

何と初雪の空くもりなるやうなれど、さもなくまことに初雪のふりいでたるは、あるもみをて其ままふきこめるこそ、さればへそて過ぎやすきものなれ。夢にも夢のやうにおぼえて、ふりつもりたるのみかは、猶ふりそふるなどいと多かるに、

乃きうを夢ぬ世よあをとくるこゝろ
ひそや横川の杉むら古き事共
にほまれを語り今
昌しく受安と思ひ侍りた
心もとなく起きよ
云々と思ふ明たつ横川
立横川の杉むらや

そや、あく無慾の事やから現もなく
ぢそそ更におぼえず斯もろうねを
ろをきふあらねもく思ひ
さまに新きゆく肥の大をたゞく祐
の乾く像をなり今ん稚貝を仍
らなそ書おく文字に姿まて名の
跡とて懐うやもく曲下なそんやふ此

鳥なかいと珍出、そて往まへ其かうち
妙みへ色へさなゝ雲ふまへやく
そて初雪や名ふけつ景分のやく
なまゝゝよ高路ふあらねを別
のをと出そうひそ今を思ふようひそ
なき空あけさをそめてひくよ心
ひそゝ強脆ひを新にほく

こゝろなぐさめ此島もなぐさむ松楽
岩臺乃緑となんつゝまん夕雪の
あるうちに初雪うたを詠るよめる今
其筆もの跡多けれ共まだ詠る事もあまた
けれうれしと前をまねび集めて一首ともち
龍尾に社多の跡をとゞめ
つゝまんき吊ひの

心をすめる折うふし鬼鐘なり
聲〳〵乃ゝ南無阿彌陀仏うち如聚
あまた（同上ともにうたへり）
中空の雲うち見えつゝ雪み
あゝくさそ白妙芝もり雪の朝
とたえて花身うち姫君うもひ
きもなうゝもよう茶みもる

実あるにあらず、
佛の功徳をもて
あらわしたまえる
ものなり、
金色の光
みそなわし、
重宝樹の林
ふつきをもて
なり、

氣色うるわしく
仏の功力
ちまちに
楽の基
池の汀
更に
七宝
多の

羽風をそえ、
ものに
方を
なり、

昭君

昭君者本南郡秭歸人也父名嬙年十七以良家子選入掖庭積三年不得見元帝宮人多貧賂畫工毛延壽圖形以獻帝案圖召幸之昭君入宮既不得見常怨恨延壽遂使匠圖形皆爭賂延壽獨昭君不肯匈奴來和求美人帝以昭君行臨去召見驚其容貌為後宮第一帝重信於外國故不復更人將以與之昭君遂行帝後悔殺延壽

く由ゆ行ゆき昭君帝ひの后に今たく
とう王母ぼ私宅しと忽ゆ(レテ村施ス心ヲ)未だ散かる花
の木陰なき立よりれ(レテ)ば(ハル)下、人ひと
る是へ唐土とう(レテ)の里なるくとう
王母ぼとおう(ハル)次婦の者ていなを
ひとり(レテ)賜しきぶ分なれ美名を昌に
く(レテ)良安ろ昭君とうれを号つ容顔
人ま後ちろうきぶ分なるを前世
の宿縁なるなもん諸人み
中なえうまて胡国へ移され漢
宮萬里へ外みて兄弟ぬ方へ松ゐ
思ひ留るう帰ていきれ供奉の

官軍も松泊の道を取て宿営せ
を奏し、馬上琵琶を弾ずる
ことよろと、周防
侍も今は思ひ乱れ
糸切の思ひ乱れて風そ
ことに寄くる本陰の塵をそ
未本陰の庵を掃ひ、物の本旨を清めく
心なけれとも、(未)と参し、私
又ハ筆を執ておれ
ことや心を昔のまゝ
のいとくもくとする老の姿も鏡
よの常の庭をも

秋くれや　山を隔てゝ　日も入あひの
かねてもそゝする夕嵐の　独ごとへ
思ふ事も　なけれど　あはれ
天とこゝろ　落葉ふつゝを　本落
となりねん　哉
あやもなの　つゆ　本落や　嵐も塵
となりねん　哉　世中をさるよしく

心よ　まてこゝろのみ
の露深の　あやはもそゝ
みへうよ　紅葉　そもそも独や　涙
の雫の　用哉　是
も　あゝて　小篠の上　あるも
さうに　風　哉
休まそもなれ　めそよ　北国　案内

よし（シテ）なきみくわ（ワキ）うらにて是（ワキ）も此
あるうり（ワキ）伝（ワキ）をの（ワキ）みて作る昭君の
事（ワキ）を聞（ワキ）およひ（シテ）ぬるまあた
まうくい（シテ）あるうり（ワキ）有ることを聞（ワキ）
やい（ワキ）ふみ（ワキ）んや（ワキ）度事（ワキ）を是なる
物乃本（ワキ）なれきとめ（ワキ）女婦（ワキ）とる法
なけきこと（ワキ）とも不審（ワキ）ることく（シテ）昭

君胡國くらい（ワキ）ゐ（ワキ）て時此物（ワキ）をう（ワキ）る
おきて（ワキ）和胡國（ワキ）まて（ワキ）空（ワキ）くなるうん。
此やなきもかまくら（ワキ）とゆ（ワキ）るし
ゐるうや（下本）胡國（ワキ）まく（ワキ）うくなる
おゆ（ワキ）ん（ワキ）に柳（ワキ）を指（ワキ）なり（ワキ）さる
昭君胡國くらい（ワキ）ゐ（ワキ）てを（ワキ）
指うくる（シテ）昭君胡國（ワキ）う

つゝもり申なく
天下をさめ初めなり（本ニハ「サレコヲ」トアリ）とうれへ
胡国の軍こゝろよく
好て（本ニハ「不」トアリ）されいなるよき人一人を
ひろひなんやとこゝろくに美人切一人を（本ニハ曲下ノ一字ナシ）
こゝろくまに〳〵和睦して甚ちか
くしくまに〳〵綸旨有てみかも漢
より宣旨なん三千人出寵をも何をも

こゝろをもち〳〵そこくに宮女の行跡高位
の姿（本ニハ「ヤウ」トアリ）賢愚を漏れ
を記し申なかに
をそこくして胡（本ニハ「ハ」トアリ）を
乃軍をちかめんと綸言あるを（本ニハ「宇」トアリ）
こゝろくの宮女達是ばいでや思
にも綸こするくに皆賄賂

を贈りたく候
されどうもる甚深 何をみるも妙
みく柳絮風 嬰桃李露
雪をねむき姿あり中るも昭
君は双ト方おきみくみく帝ひ
えなりそれをたのめゆく
なんぞうちとけく有まじ圖
うみをまた俤のあまりかよふ
さうは寵を甚深 君ゆ
わくの言葉なすとや思ひんか
なくく昭君を胡國ゆまで
昭君胡國遷されり謂ハ承をひめ
ありし出しる事
昭君のうけを

昔もさまたありて桃栗を云ひ出し仙
女と契りおきすれば仙女そらく
明りうへ桃のえだを鏡に見ゆるより則仙
女其姿ありありいさゝかも狂ひ物をも映
さゝるうつゝ影をうんとそれを仙女其
すゝさなるをつゝく見るたよすがき
それのみあらん鏡ゆへ恋しきひとりう
つるあれど寝ても寝ても寝ても寝ても
きんなうらをもつて古郷を鏡
ゆ映しとへとけつゝとり拭くあり
そこにいかに昔よ年を経ても
ある水ハ散かるもやいそはゝくゝをもんと思ひ
きんきんみりくゝ法居なもくゝ

昭君ヲ見ヘテ昭君ヲ
父母ヲ
ノ本ヲ
君夜ノ
ソレ体ノ
ル如ク
将ヲ幽霊
今ノ
音ヨキ
耶将ヲ
父母ノ
ノ

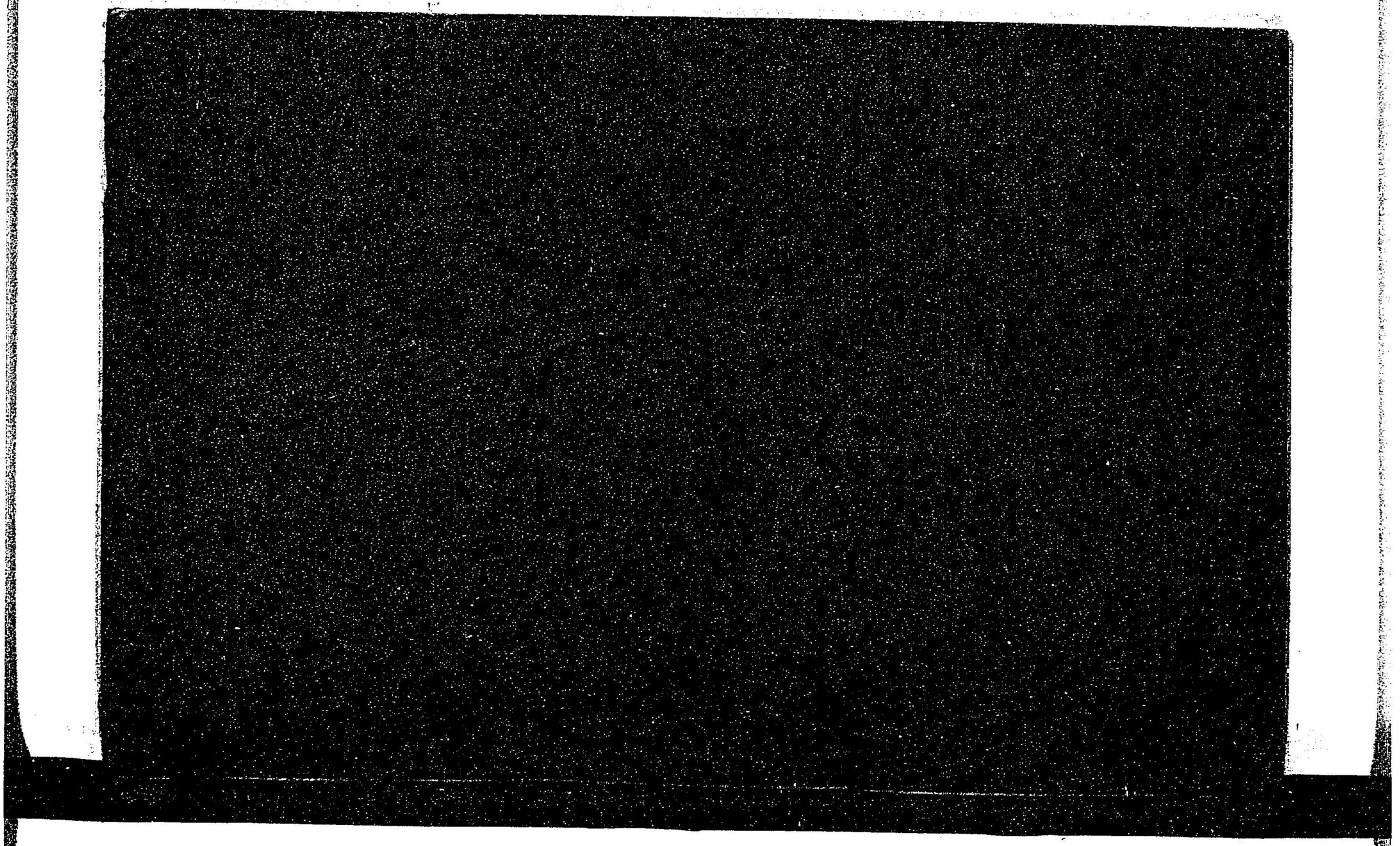
きや（レテ）そもおろ
こゝろなきぬ其姿鏡のようにて見
ゞ（レテ）ゝ（ト）ゝ（ニ）ゝ海も亂れ狂ひ鏡のより
くうみの兄をとへ鬼とゝもあり道
理や（理に當る）おとろ〳〵敷（ク）筋ハシ
をもなきくうあり皆さゝて
たまゝぬへ（レテ）ゝ（ト）ゝ（ニ）ゝなのりゝて話しさけ

耳なき鎖をさけなとへ（レテ）鬼神と鬼
給ふ姿を形う〳〵鏡よ寄そひさく
も居ても鬼ともこそて性人とハ見ぬ
ちうあゝぬう我ありゝ怖しかもる
就つきうう面目なくて立ゆる。△
昭君ハ慨ハゞ我のをよとおゝた
罪を死すハ海や底ゝまを

255
164

明治四十一年九月廿日印刷
明治四十一年九月廿五日發行

著作權所有

著作者　奈良市東城戸町三十八番地　金春七郎
發行兼印刷者　東京市日本橋區通四丁目七番地　江島伊兵衛
發行所　同市同町同番地　椀屋謡曲書肆

よもあらじ
と思ひて
なれ行く
月日
かくて
影をも
のこす
代の
心こそ
はかなく
思ひ
かな
ちまた
に
雲
日
そう
たに
を